

乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因

高橋 有里

Parenting stress and associated factors in mothers of infants

Yuri Takahashi

要 旨

本研究の目的は、乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因を明らかにすることである。対象は、岩手の2村に住む乳児の母親199人である。6つの尺度、育児ストレス、対児感情、母性意識、夫との関係性のストレス、特性不安、そして特性怒りについて調査した。その結果、育児ストレスは、パーソナリティとしての不安になりやすさをベースに、夫との関係性のストレスや子どもへの否定的感情、母親役割の非受容感が影響していた。しかし、怒りやすさや子どもに対する肯定的感情は影響していなかった。乳児期の育児ストレスは怒りよりも不安や抑うつ感が主となっていると考えられた。また子どもに対して肯定的感情を持っていても育児ストレスが低いとは言えないことが明らかとなった。また出産直後からの人的支援は子どもの肯定的受容を促進すると考えられるが、それだけでは育児ストレス軽減には充分ではないことが分かった。また、生後6カ月頃からの子どもの発達の特徴は、母親の育児困難感を高める要因となり乳児期の育児ストレスに影響していると推測された。さらに、専業主婦や働いている母親よりも産休中・育休中の母親のほうが積極的・肯定的な母性意識が低く、逆に消極的・否定的な母性意識が高く、子どもに関連した育児ストレスが高いことが明らかとなり、産休・育休中の母親への支援が重要であると考えられた。

キーワード：育児ストレス，乳児，母親

【はじめに】

近年、「超少子化国」¹⁾となったわが国は、乳幼児に接する機会の減少、核家族化、近隣者との関係の希薄化などにより、育児ストレスの蓄積しやすい環境にあると言われている²⁾。育児ストレスは誰にでも少なからず存在すると考えられるが、過度に増強すれば虐待につながる危険性が高い。児童虐待は連日報道されている通り増加の一途にあり、特に被虐待者は幼児が多く、虐待者は実母が6割を超えている³⁾。このような中、平成16年度には児童虐待防止法及び児童福祉法の改正により体制の整備が図られ、本県でも児童虐待防止アクションプランが策定された⁴⁾。しかしながら、本県の児童虐待相談件数は17年度274件（10年前の約25倍）と増え続け、アクションプランに掲げられた「発生予防」・「早期発見」が重要課題となっ

ている。それを受けて、各市町村の育児支援対策や特定非営利活動法人などの活動も活発になってきているが、まずどのような背景の人がどのような要因によりストレスを生じているのかを明らかにすることにより、ニーズに合った具体的な育児支援活動を計画できると考えた。

そこで今回は、虐待発生予防となる育児支援活動を行うための基礎資料として、現在乳児を育児中の母親の育児ストレス状況とその関連要因について調査したので報告する。

【方法】

1. 対象：岩手県内A村在住の乳児を育児中の母親全員と、B村在住で村の乳児健診に訪れた乳児の母親。
2. 調査方法：自記式質問紙調査

A村では村の保健師より対象家庭に郵送してもらい、回収は返信用封筒による個別郵送とした。B村では、乳児健診の待ち時間に個別に依頼し配布、回収はその場で所定の回収箱に入れるか、返信用封筒による個別郵送とした。調査期間は、平成18年1月～3月であった。

3. 調査内容

- 1) 育児ストレス尺度 22項目
- 2) 母性意識尺度 12項目
- 3) 対児感情尺度 28項目
- 4) 夫との関係性のストレス尺度 5項目
- 5) 特性不安尺度 20項目
- 6) 特性怒り尺度 10項目
- 7) 対象者の属性（年齢，就労形態，家族構成，自宅の構造，産後1カ月間の手伝い）
- 8) 乳児の属性（性別，月齢，出生時体重，第何子か，健診での指導の有無，病気・心配事の有無）

尺度の概要

- 1) 育児ストレス尺度：佐藤ら⁵⁾の育児ストレス尺度を用いた。ラザルスら⁶⁾のストレスの認知的評価モデルを参考に考案された尺度である。「夜泣きがひどい」「寝つきが悪い」などの子ども関連ストレス尺度12項目と、「どう接すれば良いか分からない」「感情的に接してしまう」などの母親関連ストレス尺度10項目の計22項目からなる。「1全く悩んでいない」「2あまり悩んでいない」「3やや悩んでいる」「4非常に悩んでいる」の4段階で評定され（子ども関連 得点範囲12-48，母親関連 得点範囲10-40，両尺度 得点範囲22-88），得点が高いほどストレスが高いことを表す。この尺度の信頼性については，佐藤ら⁵⁾により，子ども関連ストレス尺度 $\alpha = .86$ （12項目， $N=817$ ），母親関連ストレス尺度 $\alpha = .90$ （10項目， $N=817$ ）と十分な値が得られている。また，本尺度は日本人の母親500名に対する育児ストレスに関する自由記述⁷⁾から項目が作成されていること，抑うつ尺度との相関⁸⁾からも，その妥当性が確認されている。
- 2) 母性意識尺度：大日向⁹⁾の母性意識尺度を用いた。母親役割の受容を，「母親であることが好きである」などの積極的・肯定的な意識6項目と，「子どもを育てることが負担に

感じられるなどの消極的・否定的な意識6項目の計12項目で測る尺度。回答方法の4段階評定は，表現を修正し「1全くそう思わない」「2あまりそう思わない」「3ややそう思う」「4非常にそう思う」とした。積極的肯定的意識，消極的否定的意識とも6項目の平均得点を用いる（それぞれ得点範囲1-4）。積極的肯定的意識項目では得点が高いほど母性役割の受容が積極的肯定的で，消極的否定的意識項目では得点が高いほど母性役割の受容が消極的否定的であることを示す。この尺度の信頼性に関する検討は報告されていないが，幼稚園から高校生までの母親497名を対象とした調査⁸⁾で，母性意識尺度21項目に子どもに対する感情を尋ねる15項目をあわせた27項目の因子分析により下位尺度の再現性の検討が行われている。その結果，母性意識尺度の積極的肯定的6項目が第1因子に，消極的否定的6項目が第3因子にまとまって抽出された。妥当性については，子どもに対する意識に関する因子との検討の結果，子どもの成長を喜べるかどうかで積極的肯定的尺度得点は弱いながら正の相関（ $r = .13$ ， $p < .01$ ），消極的否定的尺度得点は負の相関（ $r = .34$ ， $p < .01$ ）を示し，子どもが自分の思い通りにいかない，子どものためになっているか疑問といった子育てに自信がない複雑な意識と消極的否定的尺度得点に負の相関（ $r = .17$ ， $p < .01$ ）が認められている。

- 3) 対児感情尺度：花沢⁹⁾の対児感情尺度改訂版を用いた。乳児に対して大人が抱く感情を肯定的側面（接近感情）と否定的感情（回避感情）の2側面から測定する尺度。「いじらしい」「うつくしい」など子どもを肯定し受容する感情を示す14の形容詞から構成される接近項目と，「やかましい」「うっとうしい」など否定し拒否する感情を示す14の回避項目の計28項目。回答方法の4段階評定は表現を修正して「1全くそのような感じがしない」「2あまりそのような感じがしない」「3ややそのような感じがする」「4とてもそのような感じがする」としたが，集計の段階で先行研究と比較できるように原版と同じ0-3に配点しなおした。（接近，回避得点それぞれ得点範囲0-42）。接近項目では得点が高い

ほど子どもを肯定し受容する感情が強く、回避項目では得点が高いほど子どもを否定し拒否する感情が強いことを表す。また、個人の中で接近得点と回避得点がどの程度相克しているかを表す拮抗指数を、回避得点/接近得点 $\times 100$ で求めることができる。この尺度の信頼性については、女子大学生35名を対象とした再検査法（5カ月間隔）で、接近項目 $r = .85$ 、回避項目 $r = .85$ と十分な値を示している⁹⁾。また妥当性については、田研式・親子関係診断テストの結果と併せて検討され、テストで関係良好群とされた35名が関係拒否群22名よりも有意に接近得点が高く、回避得点が低かったことが示されている。また女子高生を対象とした調査では、赤ちゃん好きの程度と接近得点で $r = .76$ の正の相関が報告されている⁹⁾。

4) 夫との関係性のストレス尺度：Abidin¹⁰⁾の Parenting Stress Index を、奈良間ら¹¹⁾が翻訳、修正した日本版 Parenting Stress Index (以下 PSI) の下位尺度を用いた。PSI は、子どもの特徴に関わるストレスの8下位尺度、親自身に関わるストレスの7下位尺度の計15下位尺度78項目からなるが、今回はそのうち親自身に関わるストレスの「夫との関係」因子の下位尺度5項目のみ用いた。「子どもを産んだことにより、夫との問題が思ったより多く生じている」などの項目で、回答方法は一部修正して「1全くそう思わない」「2あまりそう思わない」「3ややそう思う」「4非常にそう思う」の4段階で評定した(得点範囲5-20)。得点が高いほど夫との関係におけるストレスが高い。この下位尺度の信頼性(Cronbachの α 係数)は、 $\alpha = .83$ が確認されている。妥当性については、川井ら¹²⁾の育児不安項目総点との相関が、親自身に関わるストレスの下位尺度は $r = -.419 \sim -.647$ で有意($p < .01$)であったことが報告されている¹¹⁾。

5) 特性不安尺度：State-Trait Anxiety Inventory (以下 STAI) 日本語版¹³⁾を用いた。Spielberger ら¹⁴⁾が開発した STAI の日本語版。自律神経の興奮などを伴う一時的状況的な「状態不安」と比較的安定した個人内特性としての不安を喚起しやすい傾向の「特性不

安」とからなる尺度だが、今回は「特性不安」の20項目のみ用いた。「疲れやすい」「泣き出したくなる」などの項目で、「1全くそうでない」「2いくぶんそうである」「3ほぼそうである」「4全くそうである」の4段階で評定され(得点範囲20-80)、得点が高いほど不安を喚起しやすい個人内特性をもっていることを示す。特性不安の信頼性については、大学生618名について α 係数を算出した結果、平常時 $\alpha = .87$ を確認し、その後1.5時間後、1週間後、80日間後に再テストを行い、80日後でも $\alpha = .80$ が保たれていたことが報告されている。また、妥当性については、他の不安尺度との相関も高く、平常時とストレス時における状態不安と特性不安の関連で、ストレス時において相関係数が高まることから、特性不安尺度項目が安定したパーソナリティとしての不安傾向を表すことが示されている¹³⁾。

6) 特性怒り尺度：State-Trait Anger Expression Inventory (以下 STAXI) 日本語版¹⁵⁾を用いた。Spielberger ら¹⁶⁾が開発した STAXI (状態-特性怒り表出目録) の日本語版。情動状態としての怒りの強さを測定する「状態怒り」と個人内特性としての怒りやすさ「特性怒り」とからなるが、今回は「特性怒り」10項目のみ用いた。「気が短い」「怒りっぽい」などの項目で、回答は一部修正して STAI と同じ4段階評定(range 10-40)とした。得点が高いほど怒りやすい個人内特性をもっていることを示す。特性怒りの信頼性(α 係数)は、鈴木ら¹⁵⁾により $\alpha = .839$ が確認されている。妥当性については、Spielberger ら¹⁶⁾の原版と因子構造がほぼ一致している¹⁵⁾ため、因子的妥当性がおおむね確認されていると言える。

4. 分析方法

各尺度は、内的整合性を信頼係数(Cronbachの α 係数)にて確認した後、それぞれの採点方法に則り単純集計を行った。その後各尺度間の相関(Pearsonの積率相関係数)を算出し、次に育児ストレス尺度を目的変数、これ以外の尺度を説明変数として重回帰分析を行った。また、デモグラフィック要因との関連を検討するため、対象者の属性を変数として各尺度平均得点の差を対応のないt検定、一元配置分散分析により検定した。

分析には統計ソフト SPSS Ver.13.0J for windows を使用した。

5. 倫理的配慮

質問紙には、調査の趣旨と調査内容の説明のほか、分析では個人を特定しないこと、本目的以外には使用しないことを明記した文書を付けた。また、A村では村からの説明書を同封して保健師から発送してもらい、研究者は対象家庭の住所・氏名などの個人情報には触れなかった。B村では、乳児健診の待ち時間に1人ずつ口頭でも説明し、協力いただける方のみ配布した。

【結果】

対象の構成

質問紙は279部配布し、回収は199部（回収率71.3%）ですべて分析対象とした。199名は全て女性であり、年齢は19歳から44歳まで平均29.4歳（SD=4.9）、20代と30代が約40%ずつであった。就労形態は、無職125名（62.8%）、フルタイム42名（21.1%）、他にはパートタイムや自営業が少数いた。対象の配偶者である夫は19歳から56歳までで平均31.3歳（SD=6.1）、母親とほぼ同様の年代構成であった。子どもの人数は1人から5人で平均1.7人（SD=0.8）、1人が約半数、2人は3割であった。世帯構成では親とその子のみの単世帯が73.4%、祖父母と同居している二世帯が26.6%であった。自宅の構造は、一戸建て住宅が65%、

アパートや社宅などの集合住宅は35%であった。産後1カ月間の手伝いは、「里帰りして実母に手伝ってもらった」が約6割、「特に誰にも手伝ってもらわなかった」2割で、「義母や実母に自宅に来てもらって」は少数だった。対象の乳児は、男児92名（46.2%）、女児104名（52.3%）の196名（無回答あり）。月齢は平均6.5カ月（SD=3.2）。出生体重は1,680gから3,906g、平均3,013g（SD=401.6）で未熟児が7%いた。第1子が半数であった。これまでの健診で異常や指導があったものの20名（10.1%）、これまで病気や心配事があるものの30名（15.1%）であった。

尺度の検討

まず各尺度について内的整合性を信頼係数（Cronbachの α 係数）により検討した。育児ストレス尺度は子ども関連ストレス尺度 $\alpha=.801$ 、母親関連ストレス尺度 $\alpha=.852$ 、両尺度得点 $\alpha=.896$ 。母性意識尺度は、積極的肯定的意識項目 $\alpha=.768$ 、消極的否定的意識項目 $\alpha=.630$ 。対児感情尺度は、接近項目 $\alpha=.667$ 、回避項目 $\alpha=.641$ 。PSIの親自身に関わるストレスの「夫との関係」因子は $\alpha=.738$ 。STAI特性不安尺度は $\alpha=.799$ 、STAXI特性怒り尺度は $\alpha=.870$ であった。十分高いとはいえない尺度もあったが、内的整合性に問題はないと判断した。したがって、以降は各尺度の項目の合計点を用いて分析した。

各尺度得点の平均および標準偏差を表1に示す。各平均と標準偏差は、育児ストレス尺度の子ども

表1 各尺度得点の平均および標準偏差

		n	Mean±SD
育児ストレス尺度	子ども関連ストレス得点	188	17.3± 4.6
	母親関連ストレス得点	183	14.4± 4.4
	両尺度得点	175	31.5± 8.3
母性意識尺度	積極的・肯定的意識	193	3.2± 0.5
	消極的・否定的意識	191	2.1± 0.5
対児感情尺度	接近感情得点	186	32.4± 5.7
	回避感情得点	189	8.9± 5.7
	拮抗指数	180	28.4±20.2
PSI	夫との関係	197	10.0± 3.5
STAI	特性不安	199	41.7± 8.7
STAXI	特性怒り	194	20.7± 6.1

関連育児ストレス17.3±4.6, 母親関連育児ストレス14.4 ±4.4, 育児ストレス両尺度得点31.5±8.3, 母性意識尺度の積極的肯定的意識得点3.2±0.5, 消極的否定的意識得点2.1±0.5, 対児感情尺度の接近感情得点32.4 ±5.7, 回避感情得点8.9±5.7, 拮抗指数28.4±20.2, PSI 夫との関係性のストレス10.0±3.5, 特性不安41.7±8.7, 特性怒り20.7±6.1であった。

各尺度間の相関

各尺度間の相関を表2に示す。育児ストレス尺度両尺度得点は、母性役割の消極的否定的意識 ($r=.414, p<.01$), 対児感情の回避得点 ($r=.445, p<.01$), 夫との関係のストレス ($r=.358, p<.01$), 特性不安 ($r=.456, p<.01$), 特性怒り ($r=.297, p<.01$) と有意な正の相関, 母性役割の積極的肯定的意識 ($r=-.273, p<.01$) と有意な中程度から低い負の相関を示した。対児感情の接近得点のみ有意な差が見られなかった。

次に、育児ストレスに与える影響因子を明らかにするために、育児ストレス尺度両尺度得点を目的変数、これ以外の尺度得点を説明変数として、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果、育児ストレスは、夫との関係性のストレス ($\beta=.255, p<.01$), 子どもに対する否定的な感情

($\beta=.238, p<.01$), 不安の喚起しやすさ ($\beta=.190, p<.05$) と有意な正の効果, 母性役割意識の積極性 ($\beta=-.192, p<.05$) と有意な負の効果を示し、その他の尺度は有意な寄与はなかった。以上の結果から、子どもに関連するストレスと母親に関連するストレスからなる育児ストレスは、今回用いた変数の中では、夫との関係性のストレス度, 子どもに対する否定的な感情の強さ, 母性役割の積極性の低さ, 不安の喚起しやすさからある程度予測可能であることが示された ($R^2=.334, p<.001$) (図1)。

デモグラフィック要因との関連

また、デモグラフィック要因との関連を検討するため、対象者の属性を変数として各尺度平均得点の差をt検定、一元配置分散分析により比較した(表3)。ただし、年代などにおいて、度数が小さい群は削除して検討した。その結果、産後1カ月間の手伝いの有無と対児感情尺度の接近得点、世帯構成と夫との関係性のストレス、子どもの月齢と育児ストレス尺度の子ども関連得点・両尺度得点、病気や心配事の有無と育児ストレス尺度の子ども関連得点・両尺度得点とに有意な差が認められた。産後1カ月間の手伝いで、何らかの手伝いがあった母親のほうが特別誰にも手伝ってもら

表2 各尺度得点の相関 (Pearson の積率相関係数)

	育児ストレス尺度			母性意識尺度		対児勘定尺度			PSI	特性不安尺度得点	特性怒り尺度得点
	子ども関連ストレス得点	母親関連ストレス得点	両尺度得点	積極的・肯定的意識	消極的・否定的意識	接近得点	回避得点	拮抗指数	夫との関係		
育児ストレス尺度	子ども関連ストレス得点										
	母親関連ストレス得点	.742**									
	両尺度得点	.936**	.929**								
母性意識尺度	積極的・肯定的意識	-.226**	-.310**	-.275**							
	消極的・否定的意識	.330**	.493**	.433**	-.300**						
対児勘定尺度	接近得点	-.068	-.021	-.013**	.356**	.010					
	回避得点	.383**	.399**	.412**	-.113	.401**	.233**				
	拮抗指数	.414**	.387**	.419**	-.266**	.387**	-.034	.849**			
PSI	夫との関係	.416**	.417**	.442**	-.074	.437**	.040	.332**	.317**		
	特性不安尺度得点	.367**	.505**	.472**	-.271**	.472**	-.069	.245**	.252**	.376**	
	特性怒り尺度得点	.215**	.367**	.290**	-.256**	.369**	-.078	.265**	.263**	.302**	.453**

**p<0.1

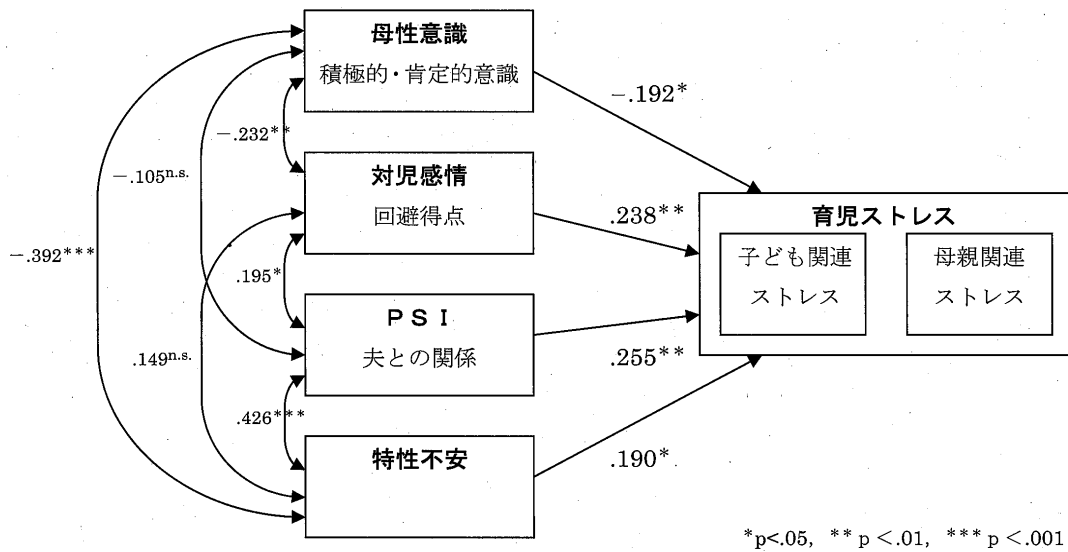


図1 育児ストレス尺度に影響する要因 (重回帰分析)

表3 各尺度得点のデモグラフィック要因との関連 (t検定もしくは一元配置分散分析)

		育児ストレス尺度			母性意識尺度		対児感情尺度			PSI
		子ども関連 ストレス得点	母親関連 ストレス得点	両尺度 得点	積極的・ 肯定的意識	消極的・ 否定的意識	接近得点	回避得点	拮抗指数	
母親の年代	20代	17.8	13.9	31.8	3.2	2.1	32.2	10.6	32.6	3.5
	30代	17.1	15.1	31.7	3.2	2.2	32.7	8.3	26.2	
母親の現在の就業の有無	あり	17.9	14.8	32.4	3.2	2.1	32.5	9.7	30.0	10.5
	なし	17.0	14.1	31.0	3.2	2.1	32.5	8.7	27.5	9.8
夫の年代	20代	17.6	14.2	31.9	3.2	2.1	31.6	9.6	30.3	10.2
	30代	16.6	13.9	30.0	3.2	2.1	33.7	8.8	26.5	9.7
	40代	17.7	16.0	33.3	3.2	2.1	31.8	8.5	30.7	9.9
産後1カ月間の手伝い	あり	17.3	14.3	31.5	3.2	2.1	32.9	9.2	28.2	9.9
	なし	17.7	15.0	31.8	3.2	2.2	30.6	8.9	30.2	10.6
産後1カ月間の手伝い	実母	17.3	14.4	31.6	3.2	2.1	32.9	9.2	28.5	9.9
	義母	16.7	13.8	30.4	3.4	2.0	33.0	9.7	27.5	9.5
自宅の構造	一戸建て	17.1	14.2	31.1	3.2	2.1	32.2	9.2	29.0	10.3
	集合住宅	17.8	14.7	32.2	3.2	2.1	33.1	8.8	27.3	9.5
世帯構成	単世帯	17.0	14.2	31.0	3.2	2.1	32.5	9.1	29.0	9.6
	二世帯	18.2	15.0	33.0	3.2	2.2	31.9	8.4	26.7	11.3
乳児の出生順位	第1子	17.4	13.8	31.1	3.2	2.1	32.5	9.1	28.8	10.3
	第2子以上	17.2	14.8	31.6	3.2	2.2	32.5	9.0	27.9	9.8
乳児の性別	男児	17.7	14.8	32.4	3.2	2.1	32.2	9.4	31.2	10.1
	女児	17.0	14.0	30.6	3.3	2.1	32.5	8.3	25.8	10.0
乳児の月齢	6カ月未満	16.3	13.9	30.0	3.2	2.1	32.8	8.1	25.1	10.0
	6カ月以上	18.1	14.7	32.6	3.2	2.1	32.3	9.8	30.9	10.0
乳児の出生時体重	未熟児	19.2	15.7	34.9	3.4	2.2	32.7	9.2	29.6	10.4
	未熟児でない	17.2	14.2	31.1	3.2	2.1	32.2	8.8	28.2	10.0
乳児健診時の指導	あり	19.2	15.1	34.5	3.1	2.1	32.6	8.7	27.1	10.0
	なし	17.2	14.4	31.3	3.2	2.1	32.5	9.0	29.0	10.1
乳児の病気・心配事	あり	19.0	15.3	34.5	3.2	2.1	30.1	9.0	27.1	10.2
	なし	17.1	14.3	31.0	3.2	2.1	32.8	9.0	29.1	10.0
職をもつ母親の現在の状況	産休・育休中	20.2	16.2	36.1	2.8	2.4	31.5	10.6	33.8	11.8
	働いている	17.3	14.5	31.5	3.2	2.0	32.6	9.5	29.4	10.3

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

わなかった母親よりも子どもに対する接近感情が強かった ($t(178)=2.011, p<.05$). 世帯構成では、複数世帯、つまり親と同居している母親のほうが夫との関係性のストレス度は高かった ($t(78.6)=2.800, p<.01$). また、子どもが6カ月以上のほうが子どもに関連した育児ストレスが高く ($t(183)=2.631, p<.01$), 一般的な育児ストレスも高くなっていった ($t(170)=2.033, p<.05$). さらに、病気や心配事がある母親のほうが子どもに関連したストレスが高く ($t(182)=2.085, p<.05$), よって一般的な育児ストレスも高くなっていった ($t(169)=2.024, p<.05$).

また、就労形態欄に産後休暇(以下産休)中・育児休業(以下育休)中と書いてあったものと現在働いているもので比較したところ、母性意識尺度で有意差が認められ、産休・育休中の母親のほうが母性役割の積極的肯定的意識が低く ($t(68)=3.559, p<.001$), 消極的否定的意識が高かった ($t(68)=3.179, p<.01$).

そこで、対象を産休・育休中の母親、フルタイムで働いている母親、専業主婦の母親の3群に分け、改めて一元配置分散分析にて3群の各尺度平均得点の差を比較したところ、母性役割の積極的・肯定的意識 ($F(2,189)=6.038, p<.01$), 消極的・否定的意識 ($F(2,187)=5.009, p<.01$), 子ども関連育児ストレス ($F(2,184)=3.254, p<.05$) で有意差を認めた。多重比較(TukeyのHSD法)の結果、産休・育休群は、フルタイム群や専業主婦群よりも積極的・肯定的母性意識が有意に低く(ともに $p<.01$), フルタイム群より消極的・否定的母性意識は高く ($p<.01$), 専業主婦群よりも子ども関連育児ストレスが高い ($p<.05$) 結果であった(表4)。

【考察】

現在乳児育児中の母親の育児ストレス状況とその関連要因を検討した。尺度の単純集計から、本対象の育児ストレスは、子ども関連ストレス17.3、母親関連ストレス14.4であった。堀田ら²⁾の結果と比較すると、本調査と同様であった。母性意識については、積極的肯定的意識3.2、消極的否定的意識2.1であり、大日向⁸⁾の結果(順に3.13、1.95)と大きな差はなかった。また、対児感情は、接近得点32.4、回避得点8.9、拮抗指数28.4であり、花沢⁹⁾の産褥期の母親を対象にした調査(順に30.4、9.3、26.3)と同様であった。夫との関係性のストレスについては10.0で、これは丸ら¹⁷⁾の0~2歳児の母親の14.8、荒屋敷ら¹⁸⁾の0~3歳児の母親の12.4と比較すると低いと言える。対象のパーソナリティとしては、特性不安が41.7であり、産後7週までの第1子を育児中の母親の調査¹⁹⁾や、6カ月児を育児中の母親の調査²⁾と同様であった。特性怒りについては、育児中の母親を対象にした文献が見当たらなかったが、成人を対象とした調査結果において20~24の平均値が得られている¹⁵⁾ため、本対象の母親の20.7はほぼ平均的な値であると考えられる。以上より、本対象の特徴は、もともと標準的な特性不安・特性怒りのパーソナリティをもつ女性で、現在乳児を育児中の母親であり、夫の関係性のストレスはあまりないものの、一般的には育児中に通常抱えるストレス程度をもっている集団と言える。

各尺度間の相関では、育児ストレスは母性役割の消極的否定的意識、子どもに対する回避的感情、夫との関係性のストレス、特性不安、特性怒りと有意な正の相関、母性役割の積極的肯定的意識と有意な負の相関があった。もともと持っている不

表4 母親の現在の就業状況別 各尺度得点の比較
(一元配置分散分析の後、TukeyのHSD法による多重比較)

		育児ストレス尺度			母性意識尺度		対児感情尺度			PSI
		子ども関連 ストレス得点	母親関連 ストレス得点	両尺度得点	積極的・ 肯定的意識	消極的・ 否定的意識	接近得点	回避得点	拮抗指数	夫との関係
母 就 親 業 状 況 現 在 の	産休・育休群	20.2	16.2	36.1	2.8**	2.4**	31.5	10.6	33.8	11.8
	フルタイム群	17.3	14.4	31.3	3.3**	2.0	32.7	9.5	29.1	10.2
	専業主婦群	17.0	14.1	31.0	3.2	2.1	32.5	8.7	27.5	9.8

* $p<.05$, ** $p<.01$

安や怒りの閾値の程度や母親自身の親役割に対する意識、夫との関係性、子どもに対する回避的な感情と、育児ストレスにはもともと母親自身の個人内特性と、現在の母親の意識、夫に対する思い、子どもに対する感情という多くの要因が影響し合っていると考えられた。一方で、対児感情の接近得点とは有意な相関が見られなかった。このことは、子どもに対して肯定的な感情を持っていても育児ストレスの程度を決定するような影響は及ぼしにくいと推測される。つまり、言い換えれば、いくら子どもを可愛いと考えていたとしても、意思に反して育児ストレスが高くなることも充分あると言えるであろう。

また、重回帰分析の結果、育児ストレスは、母性役割の積極的肯定的意識と消極的否定的意識、子どもに対する回避的感情、夫に関連するストレス、不安になりやすさによってある程度規定され、母性役割の積極的肯定的意識以外すべて負の効果を示すことが明らかとなった。したがって育児ストレスは、パーソナリティとしての不安になりやすさをベースに、夫に対するストレスや子どもへの否定的感情、母親役割の非受容感が影響して生じると言える。村上ら²⁰⁾も育児ストレスの特徴として、子どもに対する直接的なストレスや夫に対する不満や育児環境の不満のほかに、母親自身のパーソナリティから生じるストレスがあることを明らかにしている。パーソナリティとしての不安の喚起しやすさが、育児ストレス構造の基盤にあることが推測された。怒りの喚起しやすさは相関では有意な正の相関が確認されたが、育児ストレスの説明変数にはならなかった。乳児の母親の育児ストレスの様相にもともと怒りの喚起しやすさは影響があるものの、ストレス程度を規定する因子までにはならないことが分かった。幼児の虐待では、「食べ物をこぼした」「あいさつをしなかった」など、通常些細と思われる状況がきっかけで「かっとなって」発症しているものが多いことを考えると、幼児期の育児ストレスには怒りの喚起しやすさも規定要因となり得ると推測される。しかし、乳児の虐待では「泣き止まない」「寝てくれない」などの育児疲労や育児負担感からなる抑うつ感情が主と考えられ、特性怒りが規定要因とならなかったと考えられる。

また、デモグラフィック要因との関連を検討するため、対象者の属性を変数として各尺度平均得

点の差を比較した。その結果、産後1カ月間の手伝いがあった母親のほうが子どもに対する接近感情が強かった。育児による母親の疲労については、援助者が少ない者ほど慢性疲労があると言われて²¹⁾いる。やはり産後直後からの人的支援により、母親の心的負担が軽減することで子どもに対する肯定的受容が促進されるのだろう。ただし、手伝いの有無で育児ストレス度に有意差はなく、それだけでは育児ストレス軽減には充分ではないことが分かった。

また、夫との関係性のストレス度は親との同居世帯のほうが高かった。堀田ら²²⁾の育児ストレス調査では「義母と育児について意見がくい違う」としたものが約4割おり、泣きや睡眠などの子ども自身の特徴に対するストレスに次いで多かった。義父母と同居する母親にストレスの大きいことは容易に予測される一方で、夫のサポートが母親の育児ストレスを緩和させる役割を持っている¹⁷⁾ことは明らかになっている。しかし、今回の対象は先行研究^{17, 18)}と比較してもともと夫へのストレスはあまりない母親であるためか、夫との関係性のストレス度による育児ストレス程度には有意差がなかった。

子どもに関連した育児ストレスは子どもが6カ月以上のほうが高かったのは、生後6カ月頃から感覚・神経系の発達により情緒の分化が起こり、睡眠中心の生活から積極的な探索行動をとるようになる²²⁾という発達上の変化が関係していると考ええる。近藤²³⁾も生後6~7カ月が乳児期の発達の節と位置づけている。それまでは大人に働きかけられて応える大人中心の関係性から、人見知りや人の好き嫌いなど相手と自分の間の心的距離を自分で調整するなど、子どもが周りへ働きかけるようになる時期と述べている。母親は、そのような子どもとの関係性の変化に順応できず、戸惑うことが多くなるのではないかと考えられた。また、寝返りや離乳食開始といった子どもの新たな発達課題に対する環境や食への配慮など、親の育児課題が増える時期でもあると言える。それらが、母親の育児困難感の誘引となることが示唆された。

また、対象を産休・育休中の母親、フルタイムで働いている母親、専業主婦の母親の3群に分けて比較した結果、産休・育休群はフルタイム群や専業主婦群より積極的・肯定的母性意識が低く、フルタイム群より消極的・否定的母性意識は高く、

専業主婦群より子ども関連育児ストレスが高いことが明らかとなった。これまでは、母親の就労形態と育児不安・育児関連ストレスは有意差がなかったとする研究^{5, 24)}や、専業主婦のほうが育児ストレスが高い¹⁸⁾、母性意識が消極的・否定的である²⁵⁾との研究があるが、産休・育休中の母親が高いという結果を得た文献は見当たらない。しかし、産休や育休中の母親は、育児に専念するために休んでいるという潜在意識があり、思い通りに育児できなかった際の葛藤を強く体験することが推測される。原口ら²⁶⁾は、母親が自覚している「家庭人としての自分」「社会人および就労形態人としての自分」「個人としての自分」の3側面の構成割合の理想と現実での差を育児不安得点と比較し、「家庭人としての自分」の理想と現実の差が大きいほど育児不安得点が高いことを明らかにしている。本対象の産休・育休中の母親も、現実の「家庭人としての自分」としての役割負担がもともと抱いていた理想を上回っていることにギャップを感じていることが伺えた。また、同僚と比較して職場での役割の遅れを感じたり、復帰を意識したりしながら、もしくはもとの部署に戻れるか不安を抱えながら過ごしていることなどが育児ストレスにつながっているのではないかと推測される。県が2006年6月から導入した勤務成績に基づく新昇給制度において、育休者を「勤務状況不良」の区分に入れるとした²⁷⁾ことに象徴されるように、育休を取得することに対する社会的評価が、いまだ厳しいことが影響していると考えられた。

【おわりに】

本研究では、現在乳児を育児中の母親の育児ストレス状況を明らかにし、その関連要因について検討した。育児ストレスは、母親がもともと持ち合わせている不安や怒りの喚起しやすさや親役割に対する意識、夫との関係性、子どもに対する感情といった多くの要因が影響しあっていた。子どもに対する肯定的感情は、育児ストレスと相関がなかった。育児ストレスは、パーソナリティとしての不安になりやすさをベースに、夫に対するストレスや子どもへの否定的感情、母親役割の非受容感が影響して生じやすいことが明らかとなった。夫に対するストレスには、同居世帯構成といった物理的環境も影響していた。また、乳児期の育児

ストレスには怒りよりも不安や抑うつ感が主となっていると考えられた。出産直後からの人的支援は子どもに対する肯定的受容を促進すると考えられるが、それだけでは育児ストレス軽減には充分ではないことが分かった。

また、生後6カ月頃からの子どもの発達の特徴は、母親の育児困難感を高める要因となり乳児期の育児ストレスに影響していると推測された。

そして、特に今回新たに明らかになった興味深い結果は、専業主婦や働いている母親よりも産休中・育休中の母親のほうが積極的・肯定的母性意識が低く、消極的・否定的母性意識が高く、子どもに関連した育児ストレスが高かったことである。育休制度などハード面の整備だけでは解決できない課題があることが示唆され、産休・育休中の母親への支援が重要であると考えられた。ただし、産休・育休中の母親のストレス構造について言及するには、今回の調査では限界がある。今後の追加調査で検討していく予定である。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、調査の実施にご協力いただいた保健師の皆様、育児や健診受診のお忙しい中質問紙に回答くださったお母様方に、心より感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 内閣府共生社会政策統括官：平成17年度版「少子化社会白書」、ぎょうせい、2005。
- 2) 堀田法子・山口（久野）孝子：6ヶ月児をもつ母親の精神状態に関する研究（第1報）—不安と抑うつと育児ストレスとの関連から—、小児保健研究、64(1)、3-10、2005。
- 3) 厚生労働省：平成16年度社会福祉行政業務報告 児童相談所における児童虐待相談処理件数等、厚生労働省、2004。
- 4) 岩手県保健福祉部児童家庭課：児童虐待防止アクションプラン、岩手県、2005。
- 5) 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則：育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連、心理学研究、64(6)、409-416、1994。
- 6) Lazarus, R. S. & Folkman, S.: Stress,

- appraisal, and coping, Springer, New York, 1984.
- 7) 佐藤達哉：育児期の母親の育児関連ストレス・対処・サポートについての基礎的研究，児童育成研究，6，42-55，1988.
 - 8) 大日向雅美：母性の研究，川島書店，東京，1988.
 - 9) 花沢成一：母性心理学，医学書院，東京，1992.
 - 10) Abindin, R.R.: Parenting stress index (3rd. Ed.), Pediatric Psychology Press, 1990.
 - 11) 奈良間美保・兼松百合子・荒木暁子・丸光恵・中村伸枝・武田淳子・白畑範子・工藤美子：日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討，小児保健研究，58(5)，1999.
 - 12) 川井尚，庄司順一，千賀悠子ほか：育児不安に関する基礎的検討，日本総合愛育研究所紀要，30，27-39，1994.
 - 13) 清水秀美・今栄国晴：STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成 教育心理学研究，29(4)，62-67，1981.
 - 14) Spielberger, C.D., Gorsuch, R.L. & Lushene, R. E.: Manual for State-Trait Anxiety Inventory (Self-Evaluation Questionnaire), Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press., 1970.
 - 15) 鈴木 平・春木 豊：怒りと循環器系疾患の関連性の検討，健康心理学研究，7(1)，1-13，1994.
 - 16) Spielberger, C. D.: Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI), Odessa, FL: Psychological Assessment Resources, 1988.
 - 17) 丸光恵・兼松百合子・中村美保・工藤美子・武田淳子：慢性疾患患児をもつ母親の育児ストレスの特徴と関連要因—健康児の母親との比較から—，千葉大学看護学部紀要，19，45-51，1997.
 - 18) 荒屋敷亮子・兼松百合子・荒木暁子・横沢せい子・遠藤巴子：岩手県在住の乳幼児を持つ母親の育児ストレス及びソーシャルサポートに関する調査，岩手県立大学看護学部紀要，1，65-76，1999.
 - 19) 西海ひとみ・喜多淳子：第1子育児早期における母親の心理的ストレス反応（第1報）—育児ストレスの要因との関連による母親の心理的ストレス反応の特徴—，母性衛生，45(2)，188-198，2004.
 - 20) 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子：乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析，小児保健研究，64(3)，425-431，2005.
 - 21) 田中満由美・倉岡千恵：乳幼児を抱える専業主婦の疲労度に関する研究—ストレス・育児行動・ソーシャルサポートに焦点を当てて—，母性衛生，44(2)，281-288，2003.
 - 22) 福田一彦・小林重雄：日本版 SDS 使用手引，三京房，174-175，1983.
 - 23) 近藤直子：ぐんぐん伸びろ発達の芽，全国障害者問題研究会出版部，1995.
 - 24) 牧野カツ子：乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安>，家庭教育研究所紀要，3，34-56，1982.
 - 25) 遠藤恵子・佐藤幸子・三澤寿美・小松良子・片桐千鶴：山形県に住む母親の母親役割の受容と性役割に対する意識，山形保健医療研究，6，17-24，2003.
 - 26) 原口由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子・笠置綱清：母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連，小児保健研究，64(2)，265-271，2005.
 - 27) 岩手日報夕刊「育児休業は『勤務不良』？」
2006年6月28日

Abstract

A study was conducted to examine parenting stress in mothers of infants and the factors associated with it. Six scales — parenting stress, affection for the child, maternal consciousness, husband-related stress, anxiety and anger — were employed for the assessment. The subjects were 199 mothers of infants living in two villages in Iwate. It was found that parenting stress was influenced by husband-related friction, negative affection for the child and negative maternal consciousness, which are all related to anxiety. However, anger and positive affection for the child had no influence. It appeared that anxiety had a more significant effect than anger on parenting stress. Even if mothers had positive affection for an infant, parenting stress was still considerable. Human support from just after childbirth promoted a mother's affection for her infant, but this alone was not enough to reduce parenting stress. It was considered that the first six months after birth were particularly stressful for mothers. Mothers who took maternity leave from work showed more severe child-related stress and a higher degree of negative maternal consciousness than mothers who continued to work full-time or did not work. Therefore, support for mothers taking maternity leave appears to be important.

Keywords : parenting stress, infants mothers